

多次元共感による寄付促進に関するサーベイ実験

中山隼佑^a 萬田将大^b 今田隆人^c 得重侑弥^d

要約

本稿は、寄付行動の促進要素である共感性、その中でも多次元共感尺度の一部である、共感的関心と視点取得に着目し、これらの条件を組み込んだ寄付促進が、寄付金額の変動に及ぼす影響に焦点を当てている。結果としては、男女間や寄付経験の有無など、属性を限定した際に寄付金額の有意差が見られた。本稿は日本の課題点である寄付市場の拡大に向け、寄付組織が行うべき施策に一定の示唆を与える。

JEL分類番号:D64, D91, L31

キーワード:寄付行動/共感/多次元共感

^a 中山隼佑 同志社大学商学部 shunsuke.nakayama.tagulabo@gmail.com

^b 萬田将大

^c 今田隆人

^d 得重侑弥

1. イントロダクション

1-1. 研究背景

寄付という行為は、公的支援を補完する社会の潤滑油として機能するだけでなく(寄付白書, 2013), 人間の心理に及ぼす影響として、満足感の向上や、個人の社会適応の促進を高める可能性があると言われており(中島, 2019), 現代社会における寄付の重要性は非常に高いといえる。しかし、世界各国とスコア比較すると、119国中118位(Charities Aid Foundation, 2022)である。したがって、近年の日本において寄付行動の促進を検討することは、非常に重要であることが分かる。

1-2. 寄付促進の要素

日本ファンドレイジング協会の調査(2013)では寄付先を選ぶ際に重視している要素として、「活動の趣旨や目的に賛同・共感・期待できること」とする共感性、「寄付金の使い道が明確で、有効に使ってもらえること」とする情報の透明性、「寄付の方法がすぐにわかり簡便であること」とする簡便性が、それぞれ降順に並ぶと示している。また寄付白書(2013)では「活動の趣旨や目的に賛同・共感・期待できること」は寄付先を選ぶ際に一番重視されている理由と示すなど、寄付を行う際に、共感要素が最も求められていることが分かる。

1-3. 共感の定義

共感には様々な要素が存在し、近年の研究では共感を多次的に見ることが指摘されている。本稿では共感を、Eisenberg and Fabes(1991)より「他者の立場や状態を理解することによって生じる代償的な情動反応」と定義する。また登張(2000)ではDavis(1994)の研究を整理し、共感を共感的関心、個人的苦痛、視点取得、ファンタジーの四つの次元に分類し、多次的共感と呼んでいる。なかでも共感的関心は不運な他者への同情や関心という他者指向の気持ち、視点取得は他者の心理的視点を採用することと定義されており、この二つは向社会的行動と正の相関がある事が示唆されている。

1-4. 仮説

以上から、向社会的行動と多次元共感尺度の関係を示した研究は十分なされていると言える。しかしながら寄付行動に焦点を絞った研究は少ない。また中島(2019)など、寄付者の性格特性に焦点を当てた研究が多い反面、非営利組織同士の資金調達によって起こる、事実上の市場競争も存在する

とされている(Zhuang, 2014). このことから非営利組織にとって、寄付者の寄付行動を促進させる多次元共感要素の検討が非常に重要であると考え.

以上より, 本稿では共感の構成要素かつ向社会的行動に正の相関がある, 共感的関心と視点取得を用いて, 寄付の促進を行うことができるかを研究する. 本稿の仮説は以下の二点である.

仮説1: 共感的関心の要素を組み込んだ群が寄付行動を促進させる

仮説2: 視点取得の教示条件を組み込んだ群が寄付行動を促進させる

2. サーベイ実験

2-1. 目的

寄付行動に影響を与える「共感的関心」「視点取得」「統制群」の三群それぞれの寄付金額の比較を行う.

2-2. 実験内容

実験内容は以下の通りである. 初めに参加者を三群にランダムに分け, 「共感的関心」, 「視点取得」, 「統制群」のポスターを群毎に提示し, 5000円を上限に, 寄付金額を決定してもらった. ポスター内容は桜井(1988)を参考に, 共感的関心は「苦しむ彼らのために救いの手を差し伸べませんか」, 視点取得は「一度, 彼らのキモチに立ってみませんか?」という文言を組み込んだ. また統制要素に関しては, 中山・上向井・萬田(2021)を参考に, 寄付先団体の透明性と支払いの簡便性を充足させ, 必要十分な情報量を表現した. 次に, 参加者の社会的属性と過去一年間の寄付経験の回答してもらい, 実験を終了した.

期間は2022年9月6日から9月11日, Google Formを用いた3×1のサーベイ実験の形で, 計337人(男性169名, 女性164名, その他4名, 平均年齢29.9歳, 標準偏差10.5)から回答を得た.

3. 結果

表1に各群の記述統計を示す. 群毎の寄付額平均を見ると, 統制群>視点取得群>共感的関心群の順になることがわかる.

まずシャピロウィルク検定を行った結果、全ての群で $p < 0.05$ となり、正規分布に従わないことがわかった。次に、Steel-Dwass検定を用いて多重比較を行った。群1, 2間では($t=1.383$, ($n_1=109$, $n_2=104$), $p=0.350$), 群1, 3間では($t=0.954$, ($n_1=109$, $n_3=124$), $p=0.606$), 群2, 3間では($t=0.431$, ($n_2=104$, $n_3=124$), $p=0.903$)となり、いずれも有意差は見られず、今研究の仮説は支持されなかった。

表1 各群の記述統計

| | 回答数(人) | 寄付額平均(円) | 寄付額中央値(円) | 寄付額標準偏差 |
|---------|--------|----------|-----------|---------|
| ①共感的関心群 | 109 | 1098.17 | 500 | 1440.56 |
| ②視点取得群 | 104 | 1174.05 | 1000 | 1319.88 |
| ③統制群 | 124 | 1327.9 | 775 | 1664.82 |

表2 補助分析の結果

| | 検定統計量 | p値 |
|-------------------|-------|-------|
| ①男女間 | 1004 | 0.002 |
| ②寄付経験の有無 | 2.505 | 0.033 |
| ③寄付経験有り男性×寄付経験無し男 | 487.5 | 0.049 |
| 寄付経験有り女性×寄付経験無し女性 | 424 | 0.048 |
| 寄付経験無し男性×寄付経験無し女性 | 384 | 0.013 |

4. 追加分析

追加分析として、第一に、趙(2018)で示唆される通り、参加者の男女の差を観察する目的で、U検定を行ったところ、共感的関心群の男女間で有意差($w=1004.5$ ($n_1=109$, $n_2=104$), $p=0.002$)が見られた。

第二に、趙(2018)などでも焦点が当てられた¹、参加者の寄付経験の有無の差を観察する目的で、多重比較を行ったところ、共感的関心群と視点取得群の寄付経験が無いと答えた参加者間に、有意差($t=2.505$ ($n_1=109$, $n_2=104$), $p=0.033$)が見られた。

更に、寄付経験と男女間を掛け合わせた際の、群毎の差を観察する目的で、U検定を行った結果、共感的関心群のみで、第一に、寄付経験のある男性と寄付経験がない男性に有意差($w=487.5$ ($n_1=21$, $n_2=36$), $p=0.0499$), 第二に、寄付経験がある女性と寄付経験がない女性に有意差($w=424$ ($n_1=20$, $n_2=32$), $p=0.048$), 第三に、寄付経験がない男性と寄付経験がない女性に有意差($w=384$ ($n_1=32$, $n_2=36$), $p=0.013$)がそれぞれ見られた。

5. 考察

5-1. 仮説の考察

実験の結果から推察すると、寄付促進を目的として、多次元共感尺度の共感的関心と視点取得要素によって、参加者の寄付金額の差が生まれる可能性は低いと考えられる。仮説が支持されなかった理由は二点挙げられる。一点目は共感的関心の定義づけの不十分さである。共感的関心は視点取得と違い明確な教示条件がなく、桜井(1988)の質問尺度を参考に作成したため、今実験との親和性が低く、共感的関心を引き出すことができなかったのではないかと考えられる。

二点目はポスターの画像に含まれた子供の表情が共感性と関連づいたと考える。ポスターでは全群同一の子供の画像を用いて寄付を呼びかけたが、石井・平賀・阿部(2012)では、相手の表情によって

¹ 寄付者の寄付経験の有無に関しては、ほかにCheung and Chan(2000)が挙げられる。

共感性が刺激されるという事が示唆されており、今実験でも画像自体が参加者の共感性を呼び起こしたと考えられる。

5-2. 追加分析の考察

追加分析の結果を通じて、共感的関心群で男女間での寄付額の差があること。加えて共感的関心に比べ視点取得要素が、寄付経験のない者の寄付額を向上させることが見られた。

前者に関しては、趙(2018)での「男性より女性の方が寄付を行う傾向にある」とする指摘、また女性が抱く向社会的行動への関心など、既存研究との整合性が見られたと考察する。

後者に関しては、先行研究では見られない結果ではあるが、指向性を示すに留まる共感的関心メッセージに比べ、他者の心理的観点を想起させる視点取得メッセージは、寄付経験がない者に思考指標として有効に働いた可能性が考えられる。またU検定を用いて、統制群と共感的関心群間でも、10%有意ではあるが有意差が見られた($p=0.072$)ことから、特に未経験の事柄に対して、文字情報での共感的関心想起が生まれにくいことが考えられる。

6. 研究の限界と今後の展望

本稿の限界としては、仮想シナリオでのサーベイ実験であることから、実験結果と現実行動がどの程度一致しているが不明な点が挙げられる。実際の寄付行動では手続き上の手間や金銭的負担など、今実験ではこれらのコストが再現出来ていない。今実験では全群において、男性より女性が提示した平均寄付額が高い傾向が見られた(全群男性:1004.50円・全群女性:1418.30円)。この結果はBar-Tal(1976)の、男性より女性の方が援助行動が高いとする指摘と同様である。しかし、女性より男性の方が平均寄付額が高い(寄付白書・2021)という結果も出ているため、今実験が実際の寄付行動を測定出来たかは不明と言える。

今後の展望は二点挙げられる。一点目は実験室実験の採用である。具体的には河村・楠見(2015)のように、実験報酬を設けた上で、寄付の意思決定を尋ねる実験手法を用いることで、現実の寄付環境・意思決定に近い結果が得られると考える。

二点目は、属性を限定した研究の実施である。今仮説では一般化した寄付促進施策の検討であったが、先述の通り、補助分析では群内で、寄付経験のない者や、男女間で有意差が見られた。こうした点から、寄付促進要素の検討に関して、属性を絞った介入方法や仮説を検討することが必要だと考える。

7. 引用文献

- Bar-Tal, D. 1976. Prosocial behavior: Theory and research. New York: John Wiley & Sons.
- Charities Aid Foundation, 2022. CAF World Giving Index 2022. (最終閲覧日2022年9月26日) https://www.cafonline.org/docs/default-source/about-us-research/caf_world_giving_index_2022_210922-final.pdf
- 趙衡範, 2018. 日本における大学生の寄付決定に影響を与える要因に関する研究: 共同体意識, NPOに対する態度と向社会的行動経験を中心に. 同志社政策科学研究, 第20巻 第1号, 101-114.
- Davis, M. H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. Journal of Personality and Social Psychology, 44, 113-126.
- Eisenberg, Nancy and Fades, Richard A, 1991. Prosocial behavior and empathy: A multimethod developmental perspective. In M. S. Clark (Ed.), Prosocial behavior, 34-61. Sage Publications, Inc.
- 石井辰典, 平賀未来, 阿部香月. "表情認知と共感性—ネガティブ表情認知と情動的共感性の関連説(井藤・中根, 2012)の検討—." 感情心理学研究 24. Supplement (2017): ps14-ps14.
- Jun Zhuang, Gregory D. Saxton and Han Wu, 2014. Publicity vs. Impact in Nonprofit Disclosures and Donor Preferences: A Sequential Game with One Nonprofit Organization and N Donors. Annals of Operations Research, 221(1), 1-23.
- 河村 悠太, 楠見 孝, 2015. 募金広告の描写が援助対象への顕在的・潜在的評価及び寄付行動に与える影響. 心理学研究, 86巻1号, 21-31.
- 中島誠, 2019. 寄付に関する動機の構造. 名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇, 第56巻 第1号, 1-14.
- 中山隼佑, 上向井麻希, 萬田将大, 2021. 寄付行動の促進における3要素間の検討.
- 日本ファンドレイジング協会, 2013. 寄付白書 2013. 日本ファンドレイジング協会, 東京.
- 日本ファンドレイジング協会, 2021. 寄付白書 2021. 日本ファンドレイジング協会, 東京.
- 桜井茂男, 1988. 大学生における共感と援助行動の関係. 奈良教育大学紀要. 人文・社会科学第37巻 第1号, 149-154.
- 登張真稲, 2000. 多角的視点に基づく共感性研究の展望. 性格心理学研究, 第9巻 第1号, 36-51.